

ご覧頂きありがとうございます。
こちらは、スカット・馴れ初め系YouTube台本の一部でございます。

題名「久しぶりに釣りに来て、川に落ちそうなデブを助けた結果」

ナレーション	失恋したばかりの俺は、ただ心のモヤモヤを消したくて。
ナレーション	久々にお気に入りの川へと向かった。
ナレーション	普段は誰にも会わず、ひとりで釣り糸を垂らす場所。
ナレーション	その日は少し曇っていて、空気が重たかった。
ナレーション	いつも通り橋のたもとに着いて、道具を取り出した。
ナレーション	ふと視線を上げると、欄干に誰かが立っていた。
ナレーション	背を向けたその姿は、どこか儚げで。
ナレーション	ふくよかな背中が、風に揺れていた。
ナレーション	なんだか嫌な予感がして、じっと見ていた。
ナレーション	その足元が、わずかにぐらついた気がした。
イチ	『あの...、大丈夫ですか？』
ナレーション	思わず声をかけた俺に、彼女は振り向かず答えた。
嫁子	『...放っておいて。』
ナレーション	かすかに震える声だった。
ナレーション	目を凝らすと、その肩が小さく震えていた。
ナレーション	まるで、この世から消えようとしているようで。
ナレーション	直感的に、これはまずいと思った。
ナレーション	その瞬間、石が崩れる音が響いた。
ナレーション	彼女の足元が崩れ、体が前のめりに傾いた。
イチ	『あぶないっ！』
ナレーション	俺は釣竿を放り投げ、咄嗟に駆け出した。
ナレーション	彼女の腕に向かって、必死に手を伸ばす。
ナレーション	ギリギリで掴んだ感触に、俺の手も震えた。
嫁子	『...えっ！？』
ナレーション	驚いたようにこちらを向いた彼女。
ナレーション	俺の手を、強く握り返してきた。
ナレーション	お互いの鼓動が、ぶつかり合うようだった。
イチ	『良かった...、間に合った。』
嫁子	『...なんで、助けるの？』

ナレーション	その問いに答えられず、俺はただ彼女を引き上げた。
ナレーション	冷たい水の音と、俺の荒い息だけが響いていた。
ナレーション	ようやく彼女を地面に座らせ、俺は隣に腰を下ろした。
イッチ	『危ないって思ったから...。』
ナレーション	それだけしか言えなかった自分が、少し情けなかった。
ナレーション	彼女は濡れた髪を払いながら、俯いたままだった。
ナレーション	その肩が、小さく震えていた。
嫁子	『...消えたかったのに。』
ナレーション	そう呟いた声は、風にかき消されそうだった。
ナレーション	だけど、俺にははっきり聞こえた。
イッチ	『...そんなこと、言うなよ。』
ナレーション	言葉を選ぶ余裕もなく、口に出していた。
ナレーション	彼女はゆっくりと顔を上げた。
ナレーション	大きな瞳に、涙がたまっていた。
嫁子	『でも、誰にも必要とされてないの。』
ナレーション	その言葉に、胸が締めつけられた。
イッチ	『俺は...、お前を放っておけなかった。』
ナレーション	初めて会ったばかりなのに、 そんな気持ちが湧いていた。
ナレーション	川の流れの音が、少し優しく聞こえた気がした。
ナレーション	二人の間に、沈黙が流れた。
ナレーション	でもその沈黙は、なぜか居心地が悪くなかった。
ナレーション	彼女が、ふと小さく息を吐いた。
嫁子	『...ありがとう。』
ナレーション	その一言に、救われたのはむしろ俺の方だった。
ナレーション	この出会いが、運命だったとはまだ知らずに。
ナレーション	俺はただ、あの日の川を思い出すだけだった。
キャラ	セリフ
ナレーション	彼女を助けたあと、雨が強くなった。
ナレーション	体も服も濡れたままじゃまずいと思い、
ナレーション	俺は車に彼女を乗せ、コンビニへ向かった。
ナレーション	車内は、沈黙と雨音だけが響いていた。
ナレーション	店で買ったカップスープを手渡すと。
ナレーション	彼女は両手で包み込むようにして持った。

嫁子	『…ありがとう。』
ナレーション	そう小さく呟いたあと、彼女は震えながら話し始めた。
嫁子	『私なんか、誰にも必要とされてないの。』
ナレーション	その言葉が、胸に突き刺さった。
嫁子	『家でも学校でも、ずっと…否定されてた。』
嫁子	『鏡見るたびに、嫌になる。』
嫁子	『太ってる自分が、情けなくて。』
ナレーション	彼女の目から、静かに涙が落ちた。
嫁子	『職場でも…笑われてた。』
嫁子	『あんな体で看護師とか…って。』
ナレーション	俺は言葉を失った。
ナレーション	彼女がどれだけ傷ついてきたのか、痛いほど伝わってきた。
ナレーション	でも、その中でひとつだけ、聞き逃せない名前があった。
嫁子	『高校の時、動画を拡散されたの。』
嫁子	『クラス中に笑われて、壊れた。』
ナレーション	その瞬間、俺の脳裏にあいつの顔が浮かんた。
ナレーション	動画を撮った“加害者の名前”に、聞き覚えがあった。
ナレーション	まさか、と思った。
ナレーション	あの時のアイツ…史郎の名前だった。
イチ	『動画って、誰が撮ったの？』
嫁子	『たぶん、しろ…って人。』
ナレーション	やっぱり、そうだった。
ナレーション	俺の親友だった史郎の名前。
ナレーション	けれど、彼女はそれを知らない。
ナレーション	俺があいつの親友だったことも。
イチ	『…そいつとは、もう関わってない。』
嫁子	『でも…笑ってた。あの人。』
嫁子	『私が泣いてるのに、平気で。』
ナレーション	彼女の指がスプーンカップをぎゅっと握った。
ナレーション	涙が止まらないまま、それでも話し続けた。
嫁子	『カメラ越しに、私をからかった。』
嫁子	『おもちゃみたいに、扱われてたの。』
ナレーション	あの史郎がそんなことを。
ナレーション	信じたくない。でも、現実だった。

ナレーション	心の奥で、怒りが静かに燃えはじめた。
イッチ	『...辛かったな。』
ナレーション	そう口にした俺の声も、少し震えていた。
嫁子	『助けてくれる人なんて、誰もいなかった。』
ナレーション	俺の胸が苦しくなった。
ナレーション	彼女は今まで、ずっと一人で耐えてきた。
ナレーション	それなのに、こんなにも優しく話している。
イッチ	『今は...俺がいる。』
ナレーション	思わず、そう言ってしまった。
ナレーション	それが正しいのかは、わからなかった。
嫁子	『そんなこと...言ってくれる人、初めて。』
ナレーション	そのとき、彼女が初めて少しだけ笑った。
ナレーション	震えたままの笑顔に、俺の心が救われた気がした。
ナレーション	だけど、まだ俺は知らなかった。
ナレーション	この話には、もっと深い因縁があったことを。
ナレーション	そして、それは俺の“失恋”ともつながっていた。
ナレーション	彼女の姉、の名前を聞くまでは。
キャラ	セリフ
ナレーション	彼女を家まで送った帰り道、胸騒ぎがした。
ナレーション	なんだか、嫌な予感が消えなかった。
ナレーション	車の中では何も言わなかったけど。
ナレーション	彼女の手は、ずっと震えていた。
ナレーション	気になって、彼女のSNSを検索した。
ナレーション	そこには、「消えたい」「死にたい」の、言葉が並んでいた。
ナレーション	その投稿のいくつかには、ある名前のいいねがついていた。
ナレーション	史郎、あの男の名前。
ナレーション	偶然なんかじゃない。
ナレーション	俺の中で、直感が確信に変わった。
イッチ	『...やっぱり、関わってたのか。』
ナレーション	あいつが、まだ彼女の周辺にいる。
ナレーション	そう思うと、胸がざわついた。
ナレーション	翌日、俺は彼女の家を再訪した。
ナレーション	気になって、いてもたってもいられなかった。
ナレーション	玄関前で足が止まった。

ナレーション	ポストには、一通の封筒が差し込まれていた。
ナレーション	「精神科病院 紹介状」と書かれていた。
ナレーション	一瞬、頭の中が真っ白になった。
ナレーション	それが何を意味するのか、考える前に玄関が開いた。
嫁子の母	『あんた、昨日の...娘を助けてくれた子？』
イッチ	『はい...俺、イッチといいます。』
嫁子の母	『あの子、あなたのこと話してた。』
嫁子の母	『帰ってから、ずっと泣いてた。』
ナレーション	その言葉に、心が締めつけられる。
嫁子の母	『あの子、小さい頃から、ずっと孤独やった。』
嫁子の母	『誰も、ちゃんと見てやれなかった。』
ナレーション	母親の声は、どこか後悔に満ちていた。
ナレーション	俺は何も言えなかった。
嫁子の母	『あの子な...姉と比べられて育ったんよ。』
ナレーション	その瞬間、胸が大きく揺れた。
ナレーション	“姉”という言葉が、頭に引っかかった。
イッチ	『あの...姉って、どんな方ですか？』
嫁子の母	『名前は...姉子って言うんやけどね。』
ナレーション	その名前を聞いた瞬間、背筋が凍った。
ナレーション	姉子、俺の元カノの名前だった。
ナレーション	まさか、彼女が嫁子の姉...？
ナレーション	繋がるはずのない点が、突然結ばれた。
ナレーション	信じられなかった。でも、確かにそうだった。
イッチ	『その人...今、どこに？』
嫁子の母	『都会で仕事しとるわ。 何年も帰ってこんけど。』
ナレーション	過去が一気に押し寄せてくる。
ナレーション	失恋の痛み。親友の裏切り。すべてが彼女に繋がっていた。
ナレーション	彼女は、俺が知ってるよりもずっと深く、孤独の中にいた。
ナレーション	あの夜、橋の上に立っていた意味が、 少しわかった気がした。
イッチ	『...俺に、できることありますか？』
嫁子の母	『ただ、そばにいてあげて。』
嫁子の母	『あの子、笑ってるけど弱いから。』
ナレーション	その言葉に、俺は強く頷いた。

ナレーション	誰かのために何かをしたいと、 心から思ったのは久しぶりだった。
ナレーション	一人じゃない。そう言ってやりたかった。
イチ	『俺が、守ります。』
ナレーション	それは、自分自身への誓いでもあった。